



そらのおと



「ここ」にいること。

DEEP BLUE

深い深い

あお

吸い込まれそうなほどに

叶うならその中へに

溶かされたい

ただいまの空



ね、
今度会えたら
ただいまって言っても良い？

きらめきはいつでも



ドキドキするんだ
恋を始めて意識した時みたいに
キミはいつでも
恋に似たときめきと煌きを
与えてくれる

知ってた？



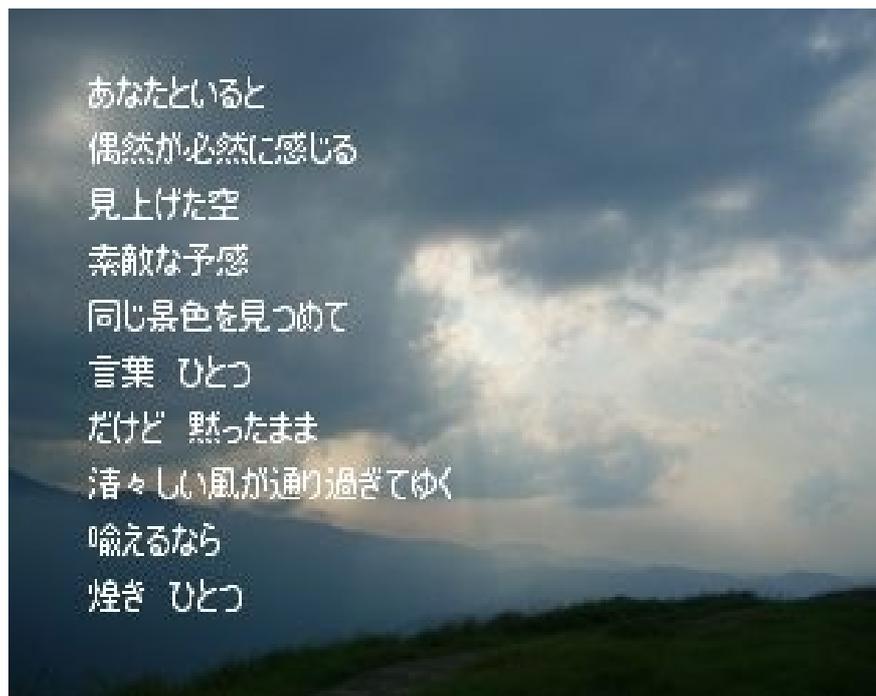
ねえ知ってた？
こんな他愛ない日常も
よく見渡せば
優しさでいっぱいなんだ

風の声

風の声

聞こえるよ





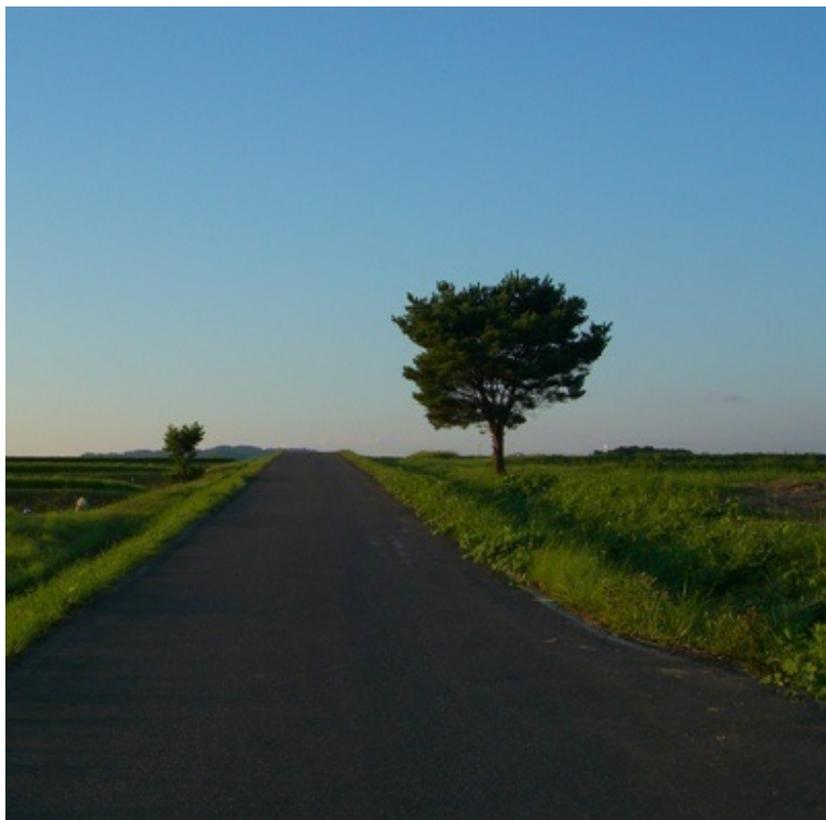
偶然、必然

本当はどちらでもいい

だってキミが傍にいる

これが最大の真実

オモイカバンヲモッテ。



さあ、帰ろう
生まれた場所に

カバンの中身

オモイが僕らを走らす

馳せるオモイが

心を掻き立てる

逸るオモイが気持ち騒ぐ

胸躍る

帰ろう重いカバンをヒトツ持って

生まれた場所へ

カバンの中身は

愛する者達を思う気持ち

帰ろう

生まれた場所へ

キミがいた夏の日



夏の思い出

盆踊り

花火大会

カキ氷

キーンっと冷えたラムネ

カラカラの喉にシュワっと刺激

スイカ割り

観察日記

ラジオ体操

真っ黒くなった肌に万遍の笑顔

肝試し

縁側の種飛ばし大会

線香花火

泣いたり笑ったり

キミはどんな夏だった？

ジオラマ



ここに来ると
今抱える悩みなど
小さなものだと思える

運ぶ



建築現場でクレーンが資材を運ぶ
宅急便が郵便屋さんが小包や手紙を運ぶ
船や飛行機が様々なものを運ぶ

整備された道路の街路樹公園の木々
家の柱や梁 細かな部品に到るまで
陸海空を渡り運ばれて来る

気づけばいつも私の側にある
生活に欠かせぬものも然り運ばれて来た
それらの元を辿ってみれば
あらゆるものには必ず誰かの
温もりが添えられ運ばれているんだな

様々な場所から運ばれ今
私の身近にある様々なもの

運ぶ事それはきっと
全てに置いての原点なんだな
届けて貰ったものの紐を解き
また私も筆を運ぶ



本当は
それが欲しかったのは
ぼくの方だったんだ

詩の風

突然風が吹いたよう走っていく

このまま さらって下さい 心ごと
風は確かな核作り出す
旋風 強風 緩やかな風

風は吹く 風は行く
あなたを撫でる風に

詩の風は流れ 詩の風は吹かれ
何処行く風か 何処向く風か

私の詩 あなたの心に吹く
ただ一陣の風に過ぎぬけれど

色んな気持ち



色んな空模様がある様に
色んな気持ちがある

僕らは同じ空を眺めていた

僕はずっと
あの日のまま
同じ空を眺めていた

あの日と同じ

真昼の月がぼんやりと浮かび
千切れた雲がゆっくりと動く空

今もこれからも
ずっと同じ空を眺めて

唯一無二の空を
何処までも繋がる空を

今もこれからもずっと
僕らは同じ空を眺めているんだね

アンテナ



いつでも どこでも 何度でも
忘れないように飛ばし続けるよ
キャッチして

灯り



日が落ちて暗闇に包まれても
どこか安心するのは
傍に照らし続けてくれる
灯りがあるから
キミはこの灯りみたいね

欲張り

良いものを見ると
欲しくなる
良いものがあると
求めてしまう
もっともっと
良い空が見たいと
旅したくなるんだ

勝負



朝から階段を駆け上った
息つく時間も勿体無くなり
シャッターを押す
見つけた瞬間から形変えていくから
一秒一秒が勝負だ



太陽の光が放たれ
私達の元に届くまで
8分の時差
そう思うと写り込んでしまった
フレアやスミアさえ
愛おしくなる
だって今光が届いたよという
合図みたいじゃない？

想いの帰る場所



願わくば
キミの所であって
欲しい

青空キャンバス



青空に描かれた
どこまでも延びる線

何処から来て
何処に向かうのだろう

飛行機は見事な
シュプールを描きながら
ゆっくりと飛んで行く

青空のキャンバスには
芸術作品が粒ぞろい

急ぐ足を止め眺めていた
穏やかな日差し注ぐ
ひとときの中で

有り触れたもの

有り触れた言葉でも
思いを伝えられたら

言葉の中の思いは巡り
いつかこの胸に戻るまで

使い古しの言葉でも
思いを伝えられたら

言葉は廻り巡る
どんな言葉でも思いの限り

注ぎ込むから

廻る言葉を生み出す力
どうか僕に授けて下さい

拙い言葉有り触れた言葉でも
いつかその胸に戻るまで





あらゆるもの全て

優しい色に包まれる時

街も山も人々も全て

魔法色に染まり

一斉にしんと静まり返る世界

何もかもがちっぽけに思えるひと時

ほんの数分間でも構わない

噛み締めた唇を緩め強く握った拳を開いて下さい

この夕焼けはアナタを優しく包んでくれていますか

知っている

ただ何気なく過ぎてゆく日々

朝焼けの中

曇りや雨の日

夕焼けの中にだって

見つけ出せる

知っているから

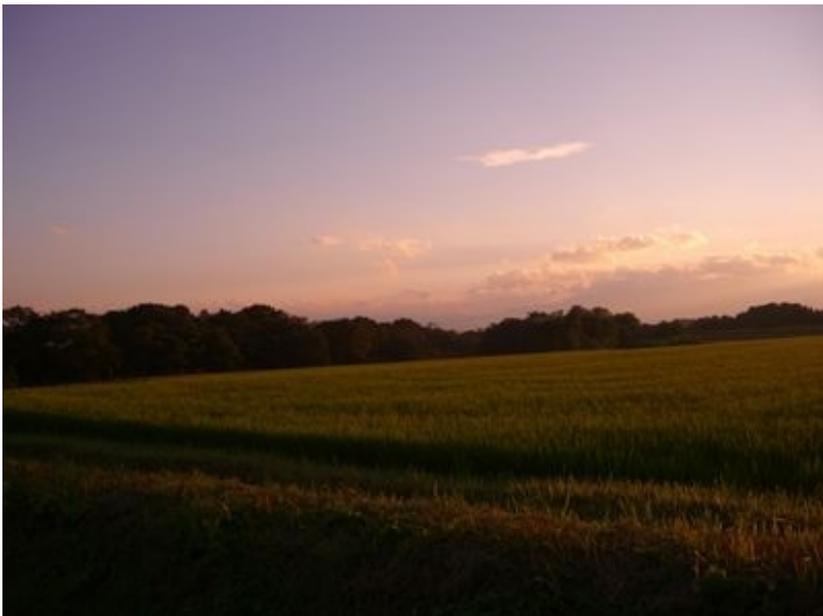
ただ過ぎてゆく時の中に

煌めきが隠れている事を

知っているから

何気ない日常にあるほんの小さな幸せを

私は煌めきが満ち降りて来る瞬間を待っている



幸せ



幸せを例えたら
きっと雲みたいなもの
幸せを喩えたら
きっと空気みたいなもの

そこにあるのが「当たり前」
なんて幸せの上に胡坐（あぐら）を
掻いたらいつか落ちてしまう

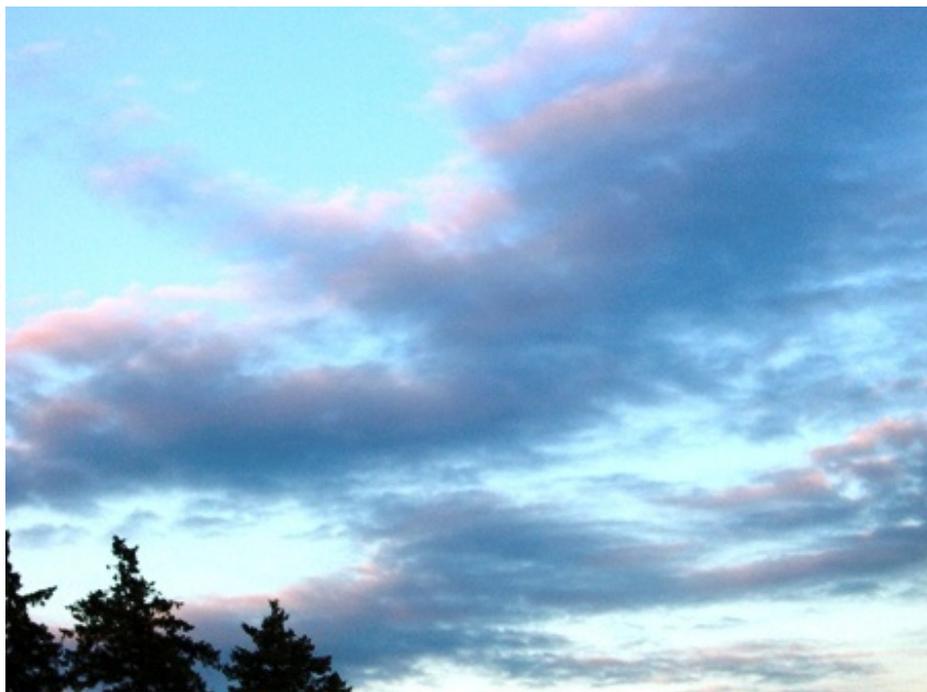
危ういものなんだ

幸せって小さな奇跡を
積み重ねて作るもの

そんな小さな奇跡こそが

幸せ

同じ空



気づかなかった
私の暮らすこの街の空だって
こんなに高く広く
綺麗だってこと

ずっと見てなかったんだ
見ているようで
目をそらしていた

空は形を変え
見る者の心を映す

出来るなら流されない自分でありたい

高く高く



そこに行かなければ

見れない空がある

それに気づいた時

少しだけ強くなれた気がした

ひだまり



ひだまり

あたたか

ひなたぼっこ

温かな場所を探す

猫になって

ゴロンとしたい

ZZZ・・・

お昼寝

気持ちいいにゃ～

な一人にもない

あー

な一人にも

ない

そらとくも

だいちだけ

な一人にもないよ

ここには

あるのは

ふつうという

日常だけ

強み

特別な道具も知識も強要も

お金もない

自慢じゃないけど

何も持ってません

だけど私の強み

唯一の強み

大事なことに気づいたから

誰にも負けないんだ